

手紙

内藤 真理子

手紙を書くのが好きだ。

九州出身で、首都から遠い所為か、我が家には手紙文化があった。東京にいる人たちに、又、自分たちが東京に出てくると、九州にいる人たちに、手紙を出して近況を知らせたり、用事を済ませたりする、必要な手段だったのであろう。

ずっと昔の話だが、夫が単身赴任をした時には、三日にあけず葉書を出していたら、一年くらいたって夫から、

「お前の手紙は内容が何も無いのだよね」と言われ、用事もないのに手紙を出してはいけ無いのだと思い知ったことがあった。

だが、たまにお祝い事の現金書留等に、例えば「ご入学祝」と書かれた祝儀袋だけが入っていて添え書きなしで届くことがある。余計なものがなく、いさぎよいともいえるが、いかにも興ざめだ。

先日、日本近代文学館で新収蔵資料展を開催していたので、ぶらりと入ってみた。

ここで収集、保管している資料を数年に一度「新収蔵資料展」として公開しているそうで、著名な作家の肉筆原稿や、手紙や葉書に書かれた私信が沢山展示されていた。

ガラスケースに入っているそれらを一つ一つ見ていると、どれもわかりやすい字で丁寧に書かれている。たまたま見たのが、谷崎潤一郎の原稿料を催促する手紙だったのだが、旅に行くのに必要だから……のような理由が丁寧に書かれていて、全く偉そうではなかった。

樋口一葉など、同じような内容の手紙が何通もあったが、みな腰が低い。後世の私から見ると大作家の先生ばかりなのにと、可笑しかった。

同時開催で、没後八十年、萩原朔太郎の特別展示のコーナーがあった。こちらにも、親しい人に送った手紙が展示されていた。中でも姪（朔太郎の妹の長女）の結婚についての手紙には、長々と結婚についての見識が書かれていて、それも直筆の生のことばで、さすがは作家の書いたものだと心情も伝わってくるような気がした。

時折、姪や友人から四季折々の絵ハガキに近況を伝えるものが届く。

私は、見た途端、とても幸せな気分になる！